

国分寺1976

(5)「居場所を求めた若者たち」

国分寺のまち、ひと、自然、歴史などを紹介するポッドキャスト番組、「国分寺レイディオ」は、東京経済大学地域連携センターが制作、運営しています。

こんにちは。ライターの近松佐左衛門です。

「国分寺1976」第5回は、「居場所を求めた若者たち」というテーマでお話します。

それでは最後までお付き合いください。

改めましてライターの近松佐左衛門です。

今回のテーマは「居場所を求めた若者たち」です。

第1回の『国分寺1976』をめぐってでは、70年代の国分寺には、人と人が出会い交流してゆく居場所としての魅力を持つ店があったことについて話しました。

そういった店の中には、まだ作家になる前の村上春樹さんがやっていた「ピーターキャット」などの居心地のよい店があり、大学生だった竹中直人さんたちにとってそのような居場所は本当に重要だったのです。

若者はいつの時代にも居場所がないと感じるものなのですが、1970年代中頃は、家族と個という問題が露わになった時期のように思います。

戦後、日本では高度経済成長というかたちで60年代から70年代初めまで急速に物質的な豊かさがやってきたのですが、物質的な豊かさだけを追い求めることに対して疑問を持つ若者たちが60年代後半には出てきます。

第2回「国分寺のヒッピーたち」ではこのような時代についてお話しましたが、この無自覚な物質文明礼賛による人間への抑圧に対して、50年代のアメリカではビートと呼ばれる若者たちがNoを突き付けて個々に逃げ出そうと試み、60年代のヒッピーたちはコミューンをつくるなど集団での文化的闘争を行いました。

また、アメリカでもヨーロッパでも日本でも60年代後半に起こった大学生たちによる政治的な要求や闘争もありました。

いずれにしても、60年代とりわけ60年代後半は、先進国の大学生を中心とした若者たちが、政治的闘争であれ文化的闘争であれ外に向かって仲間たちとともに集団で行ったものでした。

70年代に入ると外に向かっていった若者たちの理想主義的な行動は理想主義的過ぎたために立ち行かなくなってゆき集団は崩れ去ってゆきます。

熱量の高かった60年代と違い70年代に入るとその熱が急激に冷えてしまったかのような内省的な個の時代が始まるのです。

日本では、60年代までは、高度経済成長を背景として、明日は昨日よりももっとよくなるといった「未来への希望」というべき感覚が多くの人に共有されていたような気がします。それが70年代に入ってしばらくすると高度経済成長の落ち着きとともに、内省的な時代の中で若者たちの孤立化が目立つようになります。

70年代前半は、父親が働き母親が専業主婦で子どもが二人という、いわゆる「標準家族」という現在でも使われる家族モデルが出てきた頃です。

現在では、未婚率の増加や少子化などによって、このような「標準家族」は全世帯の5%ぐらいになっているので全く現実を反映していないのですが、家族4人の「標準家族」は、戦後すぐのベビーブーマーたちである、いわゆる「団塊の世代」（1947～1949年に生まれた人たちが結婚して子どもを持つようになる、70年代半ば頃からは（新しい消費行動や価値観を持った核家族は「ニューファミリー」などとも呼ばれていました）モデルケースとして考えられていました。

しかし、そのような「標準家族」の持つほころびというか無理をしている部分が、経済的に豊かになったゆえに目立つようになってきたことがわかってきたのが70年代半ば頃ではないかと思います。

それはTVドラマに象徴的に現れています。

それまでのTVドラマが描いていた家族や血縁、地縁のつながりは、例えば、1970年に放送され50%を超える視聴率をあげた、TBSの「ありがとう」（脚本：平岩弓枝、プロデューサー：石井ふく子、主演：水前寺清子、山岡久乃、石坂浩二）というドラマに描かれるようなものでした。

いわゆる「下町の人情」モノですが、この時点ではそれがまだ結構残っていたということと、逆に、なくなりつつあるものへのノスタルジーの両方の面を持っていたことがテレビドラマとして受けたのではないかと思います。

ちなみに、下町の人情を描いたテレビドラマでは、1968年に放送された「男はつらいよ」（監督：山田洋次、主演：渥美清）が翌1969年には映画となりシリーズ化してヒットしていったといったこともありました。

「下町の人情」モノは、まわりがお節介を焼くことで、好意を持つ者同士なのにお互いの気持ちに気付かずにいる二人が結ばれるという幸福な結末に向かって、家族の関係についてはわずかな波が立つことがあっても基本的には安定したものとして描かれています。

しかし、70年代の半ばごろから、家族を描く、いわゆる「ホームドラマ」は変化してゆきま

す。

理想やノスタルジーを描けば共感してもらうことができた時代から、現実や現実の少しだけ先を描かないと共感してもらえない時代がやって来たからなのかもしれません。

いずれにせよ、高度経済成長末期である70年代中頃から、家族が実はばらばらだということや崩壊しつつあるといったことを描くドラマが受け入れられるようになってゆきます。

「**岸辺のアルバム**」(脚本：山田太一)という1977年のドラマは、1974年に多摩川水害で多摩川の堤防が決壊して19棟の家が流されたニュース映像をオープニングに使ったものでした。

その映像に重なるようにジャニス・イアンが歌う主題歌「**ウィル・ユー・ダンス?**」もヒットしています。

一見平和そうに見える4人家族の崩壊と再生のドラマである「**岸辺のアルバム**」では、郊外の新築の戸建て住宅に住み経済的には何不自由なく暮らす、まさに「**標準家族**」である4人の心は実はバラバラで、それぞれ家族には言えない秘密を抱えていることが描かれます。

母親役の八千草薫さんが不倫をしている主婦として描かれたことも当時の話題でした。

ラストシーンでは、流されてしまった家の屋根の上で4人の家族は唯一残された6冊のアルバムとともに一つになり再生を誓うといったところで終わるのですが、これは単なる家族の再生の物語ではなく、家族の崩壊と再生の両面を描いたドラマでした。

次に、家族の崩壊と再生を「**岸辺のアルバム**」とは全く別の角度から描いたドラマを紹介したいと思います。

「**イエスの方舟**」というドラマで、1976年夏に起こった事件から物語は始まります。

1985年にTBSが制作、放送し、ビートたけしさんが主演したこのドラマは、昭和60年度文化庁芸術祭芸術作品賞を受賞しています。

TBSの公式ウェブサイトにある紹介文を読み上げてみます。

これ以下はTBSの公式ウェブサイト <https://www.tbs.co.jp/tbs-ch/item/d0375/> から引用【ストーリー】

昭和51年初夏、東京都下のある街で20歳の早乙女ユキ(田中美佐子)が失踪した。彼女は京極武吉(ビートたけし)が主宰する「京極聖書研究会」に身を寄せる。そこには「家へ帰りたくない」と訴える10人以上の女性信者が、武吉に救いを求めてきた。その誰もが武吉を“オッチャン”と慕い、武吉も何かの縁と彼女たちを受け入れた。翌年春、今までにも増して信者たちの親族が騒ぎ出す。それは布教に励む武吉の娘・多津子(竹井みどり)、多恵(山咲千里)を襲うほどエスカレートした。さらに、葉子(小林聡美)の父・一色(佐藤慶)が乗り込んできた。社会的地位をひけらかし、娘を返せと迫る一色に、武吉は「ご本人の意思が無ければ…」と静かに言葉を

繰り返した。

その年の暮れ、手も足も出せないと傍観する警察に業を煮やした親族側はついに強硬手段に出る。その頃からマスコミの間では、親たちの手記が雑誌に載り、テレビのワイドショーでも取り上げられるほどの話題になっていった…。

“娘を返せと親が訴え…”と大々的に報じられた、“イエスの方舟事件”を題材にしたビートたけし主演の社会派ドラマ。主人公のモデル・千石剛賢氏(マスコミには“千石イエス”と呼ばれた)の生い立ちにまで遡り「方舟」創設の動機を探る。自分のことを心から信じ、頼ってくる女性たちを突き放さなかった千石氏。彼の行動は世間の目から見れば非常識であり、秩序を乱す行為と映る。親族とのトラブルが暴力事件にまで拡大し、マスコミの報道がさらに輪をかける…。本作はこのような事件と、その主人公が懸命に生きる姿を描いている。

昭和 60 年度文化庁芸術祭芸術作品賞受賞作品。

以上で引用終わり

40年以上が過ぎた今では覚えている人も少なくなっているかもしれませんが、「イエスの方舟」事件は、1970年代後半に国分寺で起こった事件です。

TBSドラマ「イエスの方舟」は、実際に起こった「イエスの方舟」事件を、事実をもとに描いたドラマでした。

ドラマのストーリー紹介にあるように、10代後半から20代前半ぐらいの女性が「イエスの方舟」という、20人ぐらいで聖書を研究する国分寺市日吉町にあった粗末な建物のコミュニティに惹かれて入ってゆくのですが、その若い女性たちに共通するのは、家族(特に両親)との関係に悩み、家には自分の居場所がないということです。

その中には、家に居場所がないので家出をして怪しい男性たちと関係したりする中でそこにも自分の居場所がないことに気が付いてゆき、結局「イエスの方舟」を頼りにするしかない女性や、子どものころから生まれてこなければよかったのだと母親から言われ続け小学生のときから食事も与えられずに育った女性もいました。

「イエスの方舟」の代表である千石剛賢さんは、彼女たちを受け入れるかどうか悩みます。受け入れれば恐ろしい困難がやってくるのが確実だからです。千石さんはそれを「爆弾を抱えた」といった言葉で表していましたが、結果として受け入れることになりました。「聖書を生きる」ことを実践しているコミュニティである「イエスの方舟」で拒絶することは考えられないと判断したためです。

「イエスの方舟」が70年代半ば以降に受け入れた3人の若い女性たちはその後、本当に「方舟」に爆弾を抱えさせたようになります。

特に彼女たちの親は、娘が怪しい宗教に騙されていると、娘たちの意志を確認することをせず一方的に主張し、方舟に何度も乗り込み、代表の千石さんを責め立て続けます。

ついに親たちが方舟メンバーに暴力を振るい、警察は民事不介入ということで傍観し、メディアが事実を確認しないままに煽情的に取り上げるといったことが重なっていった結果、「イエスの方舟」は1978年5月に国分寺から去らざるを得なくなり、一時的な避難だったはずが、結果として26人のメンバーは2年あまり日本各地を漂流することになります。この間、方舟メンバーたちは各地を転々としながら暮らしていたのですが、メディアのほとんどが勝手な妄想的物語をつくりあげ煽情的に取り上げることでさらに方舟メンバーを追い詰めてゆきます。

特に一部の大手メディアの中には、チョビ髭を生やして関西弁で話す優男の千石さんを「千石イエス」と名付け、若い女性を騙してハーレムをつくっていると書いた書き方をしているところさえありました。

ちなみに、千石さんのことを「イエス」と呼ぶことは、キリスト教を信仰する人々にとっては信じられない無知と無理解であることに当時のメディアは気付かず、メディアの多くは「千石イエス」と呼び続けていました。

詩人の鮎川信夫さんは1986年にこのように書いています。

「今から考えると実に奇妙な事件である。何にも悪いことをしていないのに、その行動が世間の常識をこえていたというだけでマスコミから指弾され、年頃の娘を持つ親たちの被害妄想をかぎりなくかき立てたのである」（「イエスの方舟の教義」1986年）

多くの人たちが、マス・メディアの発信する、取材や裏付けのまったくない情報を信じていたのです。イエスの方舟の26人の中にはメディアの発信に対して自分たちは違うということ漂流中に手紙に書いて送った者も何人かいました。しかし、メディアはその手紙の内容の確認を怠り、洗脳されているといった報道を続けていました。

そのような中で、毎日新聞社の週刊誌・サンデー毎日だけが方舟メンバーからの手紙の真剣さを感じ取り、手紙を掲載し、「イエスの方舟」に会ってインタビューを行いました。

このことがきっかけとなり事態は大きく動くことになります。

サンデー毎日編集部は、「イエスの方舟」の話を直接聞くことで事実を知りました。

メディアの報道のほとんどが片一方の当事者の話を聞かずに行われたものだったので事実が報道されないという信じられない状態だったのです。

親側の手記が一方的に掲載され続けることでますます方舟メンバーは追いつめられてゆきます。「イエスの方舟」がどのように聖書研究を行っているかといった活動の実際を紹介するメディアはほぼない状態でした。

この70年代後半というのは、アメリカの人民寺院という狂信的なカルト教団の集団自殺事件（1978年に南米ガイアナで918人も信者が命を落とします）が起こり、信者に集団結婚を強制する宗教の問題なども現れ始めていましたので、多くのメディアは事実確

認することなしに「イエスの方舟」を同様のものととらえたのです。

このようなメディア報道は国も動かすことになります。

1980年2月には国会で取り上げられ、国家公安委員長が動き出し逮捕状も出されます。サンデー毎日編集部はすぐに動きました。

共同記者会見の場を設定して、「イエスの方舟」のメンバーがメディアからの質問に答えてゆく中で、「イエスの方舟」の実態が明らかになってゆき、事実を知ったことで、メディアの態度はそれまでと手のひらを返したように変わります。

逮捕状を出した警察は結局のところ（逮捕状の内容では）誰も逮捕することはありませんでした。

大手新聞のなかには、このような記事を掲載するところも出てきます。

「騒ぎのもとはどうやら、ごくありふれた親子断絶、家庭の冷たさだ。その背後に顔をのぞかせるのは現代社会の深淵のようにも思える。

～中略～

宗教として余りに不完全な集団だとしても、家庭に絶望、ほかに頼るものがない人たちが心の支えを求めて集まるのを妨げることはできない

～中略～

結局、事件の根底にあるのは、正規のコースを外れたものを残酷に切り捨てる管理社会、偏差値社会の片棒を、往々にして家庭までが担ぎ、はみ出したものが憩える場が容易にはみつからぬ現実だ」

（読売新聞 1980年7月5日朝刊「編集手帳」）

方舟の26人のメンバーはようやくここで社会から認められ自由に活動することができるようになりました。

方舟はこのあと、漂流の最後にいた博多で、女性メンバーは「シオンの娘」というクラブを経営（のちに移転します）し、男性メンバーは大工仕事で生活の糧を得ながら聖書研究を続けます。

千石剛賢さんは2001年に78歳で亡くなりましたが、残ったメンバーは一人も欠けずに、そして一人も増えずに現在でも毎日の聖書研究を続けるコミュニオンであり続けています。

「イエスの方舟」は宗教団体だったのかというと、そうではなく原始宗教に近いコミュニオン型の疑似家族だということもできますし、そのような姿や行動自体が宗教団体であるという言い方もできるのではないかと思います。

コミュニオンとしてとらえるならば、方舟は優れた理念と運営手段を持ったコミュニオンであ

ることは間違いありません。

60年代後半の同時期に、国分寺で「部族」のヒッピーたちがやっていたコミュニオンは、若い男性が中心の（自由に生きることを目的とした）理念先行型であり、3年も持ちませんでした。

「イエスの方舟」は国分寺時代から「部族」と同じように共同所有でお金の管理をしていたのに全く問題が起りませんでした。

違いはどこにあるのでしょうか？

それは、「イエスの方舟」が「聖書を生きる」という目的を追求した集団であったことに加えて、生活の細部での工夫がなされていたことにあるのではないかと思います。

二人を行動の基本とすることをルールとしたことは、聖書に書かれていることの実践（マルコ伝）であり、分かち合いの実践の中での思考や行動を深めることにつながっています。

女性が大半を占めるグループで、お風呂やトイレの順番など細かな、しかし大事なことは緩やかではあってもポイントを押さえていたことがコミュニオンとしてメンバーが満足しながら続いていた要因だったのでしょうか。また、「聖書を生きる」といっても禁欲的ではなく、映画を見に行ったり旅行をしたり新しい服を買ったりすることは二人組での行動であれば自由にできるルールで生活していたことは大きかったと思います

けれども、カリスマ性があるのかないのか全く分からない、リーダーではないリーダー（しかしそこが優れているところです）のもとで、「聖書を実践する」ことの追求という目的に向かって、ゆるく、しかし確かにみんながまとまっていたことが最も重要なことなのではなかったのでしょうか。

イエスの方舟の問題は、初めは**宗教の問題**と捉えられていましたが、実際には、**家族の問題**であり、さらにいうならば**女性の居場所の問題**ではないかと思います。

繰り返しますと、70年代後半に国分寺市日吉町にあった「イエスの方舟」のみすぼらしいコミュニオン（親の中には、ちゃんとしたキリスト教の教会ならばこんなことは言わなかったと言っていた人もいたそうです）を頼ってきた若い女性たちに共通していたのは、世間体や外見だけを考慮して娘の悩みを全く理解しようとしなかった、あるいは娘を虐待していた親の犠牲になることからの駆け込み寺であったことです。

そして、最後に加わった三人の若い女性だけでなく、方舟メンバーのほとんどが家族の問題を抱えて方舟にやってきた人たちなのです。

「イエスの方舟事件」から10年以上が過ぎたころにオウム真理教の一連の事件が起こります。「イエスの方舟事件」で懲りたマス・メディアは慎重すぎる態度を取りますが、その中で松本サリン事件という冤罪事件も起こります。

「イエスの方舟事件」を深くとらえて学ぶといったことをしていなかったからなのではないのか、と後悔してしまいます。

「イエスの方舟事件」に興味を持たれた方のために、この事件をより深く知るための本を4冊紹介します。

1冊目は「イエスの方舟・同乗漂流」(サンデー毎日編集部編 毎日新聞社 1980年)です。事件直後に緊急出版されたものなのでまとまりに欠けるところもありますが、この事件の全貌を知ることができる本です。最初は他のメディアと同様に誤った報道をしていたサンデー毎日が、方舟メンバーの手記の真剣さに気が付き変化し行動していった記録は、方舟を助けようとする編集部と方舟メンバーの緊張なども含めて、人と人との熱を感じさせるものです。のちに著名なジャーナリストになる鳥越俊太郎さんが若手記者として編集部にいました。

2冊目は「イエスの方舟論」(芹沢俊介著 春秋社 1985年)です。2023年に亡くなった芹沢さんは家族の問題について追っていた評論家です。「イエスの方舟事件」の意味を様々な観点から深く読み解いたこの本は、私がこの事件について取り上げる出発点になりました。何度か読まないといけないところがある本ですが、他の3冊と違って、図書館に置いてあるところも多く、古書でも容易に手に入ります。作家の宮内勝典さんが解説を書かれているちくま文庫版をお勧めします。

3冊目は「父とは誰か 母とは誰か」(千石剛賢著 春秋社 1986年)です。事件が収束してしばらくしてから芹沢俊介さんが千石剛賢さんに聞き取りをして、生い立ち、イエスの方舟事件、宗教者としての考えなどをまとめたものです。方舟メンバーからは「おっちゃん」と呼ばれていた、やわらかな関西弁の平たいことばでおもしろい例えなどを駆使しながら語る千石さんの持つ宗教者としての源流や深さについて知ることができる本です。

4冊目は「隠されていた聖書 なるまえにあったもの」(千石剛賢・イエスの方舟編 太田出版 1992年)です。「イエスの方舟事件」が過去になったあとも、方舟メンバーがどのような考えを持って「聖書を生きる」ことの実践をしているかを示した本です。方舟の聖書への理解がより深まっていることがわかります。

もうあまり時間がありませんが、最後に1976年から1977年に放送されたもう一つのドラマの話を紹介したいと思います。

それは、「俺たちの朝」（脚本：鎌田敏夫他）という青春ドラマです。

前作の「俺たちの旅」については、第1回の吉祥寺のところで話しましたが、その「俺たち」シリーズの続きです。

配役はガラッと変わり、主役の3人は勝野洋さん、長谷直美さん、小倉一郎さんになり、ドラマの舞台も吉祥寺から鎌倉となります。

偶然に導かれて鎌倉・極楽寺にある一軒屋の離れにいっしょに住むことになった親友の大学生男子2名と見ず知らずの大学生女子（大学で染色を学んでいます）が繰り広げる、コメディの要素もある青春ドラマです。

主人公の3人の若者たちはそれぞれ深刻な家族の問題を抱えています。一つ屋根の下で共同生活をするうちに、友情や愛情を越えた、お互いになくてはならない存在になってゆきます。

私は、この「俺たちの朝」というドラマの最初の放送を小学6年生で見たときには、「俺たちの旅」の二番煎じだと感じていました。

子どもには「俺たちの旅」の方がはるかにわかり易かったからでしょう。

しかし、それから40年近くが過ぎて再放送で見たときに、「俺たちの朝」の深さと込められていたメッセージにようやく気が付きました。

それは、「性の介在しない、友情を土台とした疑似家族的な関係を3人の男女が生きることは本当に可能なのだろうか」という問いかけです。

家族という制度的な関係を越えてどのように考えて生きてゆくのかといったことが、最終回で、ほのめかすかたちでわかりにくく示されているのです。

ちなみに、「俺たちの朝」で示されたメッセージを深く受け止めて、より複雑でありながら、わかり易い、誰もが心打たれる家族（疑似家族）の物語が半世紀後に発表されました。

それは、吉田秋生さんの「海街 Diary」という漫画です。

この漫画は2015年に是枝博和監督が映画化したのでそれでご存じの方も多いでしょう。

「海街 Diary」という漫画の、主人公たちの住んでいる家の外観や鎌倉の風景、登場人物の一人と金沢のまちとのかかわりといった設定には、「俺たちの朝」へのオマージュがあまりにも強く感じられます。

家族という制度的な関係を越えて人と人がつながり真剣に生きてゆくためには、コントロールできると確信したところで運命に対して抗うことも必要なのだということが「海街 Diary」という漫画のテーマとなっています。

壊れた家族の中で取り残された異母姉妹たちが互いを必要とすることに気付き行動を起こすことで、それぞれの運命は少しずつ切り開かれ変わってゆく2年半の軌跡は何度読み返しても目頭が熱くなります。

もう少し話したかったのですが、すでにかなり予定の時間を過ぎていますので今回はこのあたりでおしまいにしたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

これで「国分寺1976」第5回「居場所を求めた若者たち」を終了します。
ご意見や感想などありましたら東京経済大学地域連携センターまでメールでお願いします。
お相手は、ライターの近松佐左衛門でした。
最後までお聴きくださりありがとうございました。

第5回終了

出演:近松佐左衛門
録音:株式会社モジュール
編集:GO ARAI
ジングル作成・BGM作曲・演奏:GO ARAI

【参考文献】

- 『1970年代文化論』(日高勝之編著 青弓社 2022年)
『イエスの方舟 同乗漂流』(サンデー毎日編集部編 毎日新聞社 1980年)
『「イエスの方舟」論』(芹沢俊介著 春秋社 1985年/ちくま文庫 1995年)
『父とは誰か 母とは誰か』(千石剛賢著 春秋社 1986年)
『隠されていた聖書 なるまえにあったもの』(千石剛賢・イエスの方舟編 太田出版 1992年)
『オウム現象の解説』(芹沢俊介著 筑摩書房 1996年)
『最後のコラム 鮎川信夫遺稿集103編 1979~1986』(鮎川信夫著 文藝春秋 1987年)
『青山学院女子短期大学紀要(53)』(青山学院女子短期大学 1999年)
マスコミが事件をつくった―「イエスの方舟事件」の報道をめぐって― 渡辺良智
『サンデー毎日 2022年4月3日号』(毎日新聞社 2022年)
「イエスの方舟」と17日間 本誌が“同乗漂流”した一部始終
『週刊新潮 2020年7月23日号』(新潮社 2020年)
看板ホステスは87歳! 営業再開した「シオンの娘」に行ってみた

以上